

分科会の名称 里山と森林・林業



委員名と役割分担

分科会代表： 稗田 忠弘

記録係： 桐山 正治

実行委員： 金親博榮、大和田恭、鎌形多美夫、飯田英徳、西塚健治、鈴木剛治、本間一夫、中田麗子

タイムテーブル

第一部 講演会

11:10~11:37 県民参加型の森づくりの試み ・ 小平 哲夫 (千葉県森林研究センター)

11:37~12:05 森とくらしを結ぶ民家づくりの実践 ・ 稗田 忠弘 (さんむフォレスト代表)

12:05~13:00 昼食・交流会

第二部 討論会

13:00~14:25 パネルディスカッション 「森林とくらし」

パネラー 小平 哲夫 (研究者)

杉田 和陳 (林業家)

清水 道子 (消費者、大地を守る会)

西塚 健治 (林業家、さんむフォレスト副代表)

出席者数 41名

基調講演等の内容

小平哲夫さん

森林の管理運営は、林家など専門家相手の「林業振興型」の時代では無くなっており、市民参加型の森づくりまで変化しつつある。

「日本人の美的な心」の源泉である森の荒廃に対し、地域課題として認識と取り組みが重要だ。新しい森は、その地域や場所の環境ごとにマッチした形になる。「どんな森にするの」、「手入れから活用まで考えたか」、「専門的な検討したか」など、千年の森、豊英島での実践を踏まえた解説となった。

稗田忠弘さん

千葉の銘木、山武杉を住宅材から端材、ペレット燃料まで使いきる提案と実践活動を続けており、利用拡大すれば地域循環に繋がり、荒廃を止められる。

美しい田園風景にカラフルな既設住宅は似合わない、地産地消(千産千消)の提案と実践は、地域興しや伝統技術、文化の継承も担っており、地域の活性化が、森を元気にし本来の多面的機能の回復に繋がる。

討論会等の内容

山武杉の溝腐れ病、里山(雑木林)コナラ林の危機、カミキリムシの被害予測など、森林の放置からの危機認識が表明された。

林家として経営面では全く成り立たず、放置されている。現在、輸入木材で多くの関係者が生活し、消費者も納得しているなら林家は言う事が無い。但し、矢張り住宅は地域の土地(土質)に合った材料で作った方が長持ちするし、健康にも良い。現状に納得しない市民も増え始めており、これからの多様な森づくりのキッカケになる。

シックハウス経験で、国産の適材による木造建築の大切さを痛感、一市民として訴えや、木造校舎建築活動の「種」として努力している。

山武の製材業者は、60 - 70軒あったが現在2軒。千葉の森林の80 - 90%が人工林、放置されている森林を、まず間伐など手を入れないと循環環境が保たれない。学校も住宅も、その気になれば千葉の森も復活する、いつまでも海外材依存は続かない。

「森の文化」を有するはずの日本が対応で遅れているのは「当たり前」感覚の甘えか！

生態学の立場から、千葉の森は農業と林業の両立で維持されてきた。森は手を入れないと守れない、これからの多様な森づくりの提案は可能だし技術的にもできる。まず所有者、地域市民、広域的な都市関係者などと「地域にマッチした森づくり」を目指す事だ。森林から利便を受けている者が、役割と負担をする仕組みであるべきだ、行政からの参加者も専門的な技術支援や、調整役を惜しまないと！

分科会の結論

森は悲鳴をあげている

森林は住民の暮らしの中で空気同様当たり前存在した、我々は森のあるべき姿を熟考し取り組まなくてはならない。

森林の多面的な機能を活用する市民参加型の森づくりが求められている、この為にも林業家(所有者)と市民、行政が参画、相互協力しやすい仕組み作りが求められる。

分科会の課題

市民の関心は高くなっており、更に行動への参画を容易にしてゆかねばならない、又市民自身が知識を得る機会を身近にどう作っていくか？

林家は黙して語らない、又市民行動への素人不信感も大きい。地域的に市民活動のリーダーとの合同での勉強会など企画されるべきか？

分科会の提言

- 1 これからの森林・林業の再生には森林の公益性と役割を考慮し、地域の特質を活かした市民参加型の森づくり、森の手入れから森の資源の活用までが望まれる。
- 2 効率的な市民参加型の森づくりには市民、森林所有者、行政のそれぞれの役割に応じた相互協力システムの構築が必要となる。

その他特筆すべき内容

パネルディスカッションへの林家(所有者)の参画ができた。

ルーム内への「千年の森づくりパネル」、「山武杉規格材」展示、さんむフォレスト活動記事配布は、入場時、昼休みなど興味を示され効果的であった

反省等

森づくり市民活動家の参画が期待される。

テーマが大きくて総論的な表現になりやすい、小分科会などでの議論の充実が必要

アンケート回収

20件ありました

- 1 シンポジウムのパンフレットでの案内での参加が多い
- 2 森林・林業に興味、関心の有る方々の参加で、里山条例の認識も持っておられた
- 3 異質なメンバーでの講演や討議は、それぞれの示唆を受けたようで評価されていた
- 4 実践活動の波及、森づくりなど「これからどうする」との具体的な議論を期待されていた
- 5 森林再生の努力への人、物、金、の観点での議論、提案がなされていないとの意見あり。